

## 看護教育における地域看護の検討（第2報） — 実習目標達成の変化と看護学校調査から —

宇野 恵子 長瀬 初恵

川崎医療短期大学 第二看護科

(平成9年9月17日受理)

### A Study of Community Nursing Practice in Nursing Education Curriculum (2) Change in the Achievement of the Object of Practice through a Survey in Nurses' Schools

Keiko UNO and Hatsue NAGASE

*The Second Division, Department of Nursing,  
Kawasaki College of Allied  
Health Professions  
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan  
(Accepted on Sep. 17, 1997)*

**Key words** : 看護教育, 地域看護, 保健所実習, 自己評価, 学校調査

#### 概 要

本学では、看護教育における地域看護学実習を保健所実習としている。保健所実習の目標達成の変化を学生の自己評価から分析し、併せて看護教育の現状を調査し、検討した。

保健所実習目標の経験度は22期生と23期生の比較において大差なかった。70%以上の学生が達成したとする実習目標は皆無であった。50%以上の学生が達成したとする実習目標は「公衆衛生看護活動の展開」「継続性への認識」で22期生に比べ23期生は10%以上低率であった。実習全体からの学びとして「看護の認識の変化」は65.3%と23期生の達成率で一番高い率のものでも22期生に比べ20%以上の低下がみられた。

全国の短期大学では、地域看護学の講義を39校(72.2%)の学校で実施している。講義時間数は全国平均で36時間であった。実習は1校を除く52校(96.2%)で実施していた。

これらのことから、本学における地域看護学の位置づけに問題がある。また実習目標は保健所の現状と一致していない。今後、地域看護のあり方を講義を含め再検討する必要がある。

#### 1. はじめに

高齢化社会に伴い、医療・看護に対する社会のニーズは、大きく看護教育へも変容をもたらした。平成2年に新カリキュラムが打ち出され、さらに3年課程は平成8年度に看護教育改正がなされた。しかし進学課程では今だ方針が打ち

出されず、早急なカリキュラム改正が望まれる。

平成2年、看護婦等学校養成所指定規則の教育課程改正時には、看護婦教育課程のなかの地域看護学の規定がなく、本学では、地域看護学を独立科目とせず、成人・老人・母性・小児看護学の各科目毎に講義を実施している。実習は40時間(5日間)保健所で行ってきた。

第1報では、保健所実習が終了した時点で実習目標に対する学生の自己評価から経験度と達成度を中心に分析した。第2報では、第1報で経験度に対する達成度にばらつきがみられたことより、保健所における実習目標の達成度の変化を実習内容及び、2、3年課程の看護学校の調査から検討したので報告する。

## 2. 研究方法

### 1) 対象

第二看護科22期生（2年生）49名

第二看護科23期生（2年生）50名

### 2) 方法

①実習目標から22の細項目を作成し、22期生（平成7年度卒業生<sup>1)</sup>と同様に学生が保健所実習を終了した時点で、経験及び達成状況を調査し、判断基準とした。

②平成8年5月、全国の看護短期大学及び中四国9県の専門学校を対象に地域看護教育についてアンケート調査を行った。

本研究では、これまでの研究<sup>1)2)</sup>をもとに、地域看護学の保健所実習での実習目標の達成度について比較検討する。看護学校における教育状況調査資料を参考にまとめる。

## 3. 結果

### 1) 学生の自己評価から

第1報と同様に保健所実習が終了した時点で23期生50名に調査表を配布し調査した。

回収率は98%であった。

調査表は、前回の研究<sup>1)</sup>と同様に学生が自己評価をし、実習目標からA～Fに分類した。その学生の経験度及び達成度の割合を示した。さらに達成したとする者の内訳を実習内容から保健所内の行事などの実体験と資料や職員の話などの知識とに分類し、その割合を図1に示した。また経験度と達成度の平均を図2に示した。さらに前年度の学生との比較が容易にできるように、22期生に比べ±20.0%以上の差があるものには記号を付した。

#### A. 対象の理解

図2より、実習目標分類別経験度（以後平均経験度と略す）は22期生88.3%、23期生84.7%で、その差-3.6%である。実習目標分

類別平均達成度（以後平均達成度と略す）は22期生60.2%、23期生41.9%と、その差-18.3%である。図1の実習目標細項目（細項目と略す）より、3、4の達成度の低下を認める。また細項目2の達成内訳は知識を通して達成したとする者が63.6%（17人）と達成したとする者の半数以上を知識から達成している。実体験からは36.4%（10人）であった。

#### B. 保健所活動の理解

平均経験度は、22期生が78.2%、23期生は83.7%、その差+5.5%である。平均達成度は22期生49.0%、23期生39.5%とその差-9.5%で、経験度と比べ、達成度は低くなっている。細項目では1の達成度の内訳が実体験から44.4%（8人）、知識から55.6%（11人）と知識から達成した者が多い。細項目2では、実習目標の経験が22期生67.3%、23期生87.8%で、その差+20.5%と高率である。それに比して達成したとする学生40.8%（20人）と同値である。その内訳は実体験から30.0%（6人）、知識から70.0%（14人）である。

#### C. 公衆衛生看護活動の展開

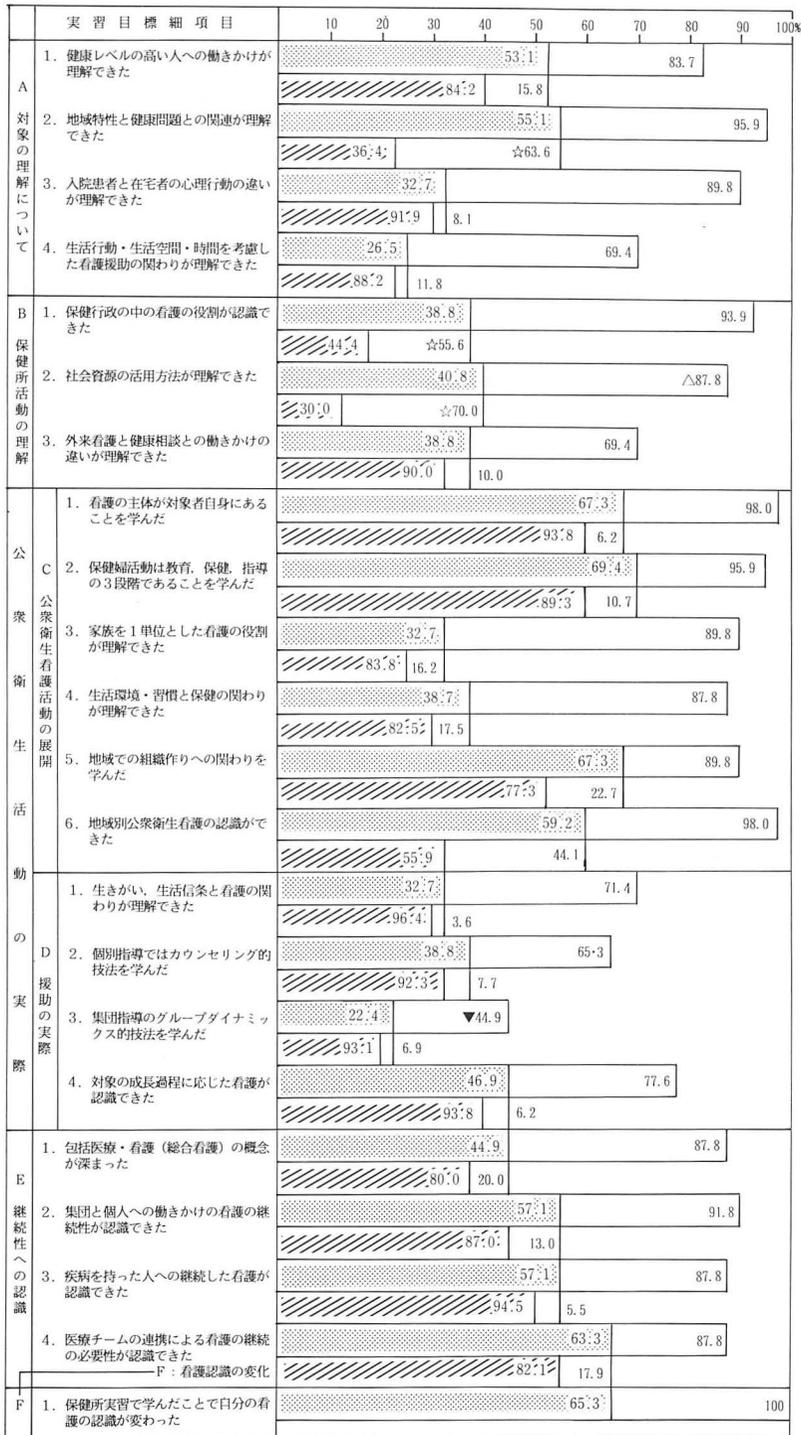
22期生の平均経験度は91.5%、23期生は93.2%、その差+1.7%と前回同様高い経験率である。また平均達成度は、22期生で69.1%、23期生で55.8%、その差-6.8%。細項目で見ると、3、4の達成度が20%以上の低下がある。この2項目の達成度の内訳は実体験を通して評価した学生は、細項目3で83.8%（13人）、知識からは16.2%（3人）、細項目4では実体験82.5%（16人）、知識から17.5%（3人）であった。このことより、個別性を重視した実習では、達成したとする者の割合は実体験からが多いといえる。

#### D. 援助の実際

22期生の平均経験度は70.9%、23期生では64.8%とその差は-6.1%であった。平均達成度は、22期生44.9%、23期生35.2%で、その差-9.7%低下がみられた。細項目では3が低下し、22期生と23期生の差が経験度で-28.6%、達成度は-22.5%となっている。全体的に低い経験度、達成度を示している。

#### E. 継続性への認識

22期生の平均経験度は93.9%、23期生では



・上段：□□□□は達成できた割合。右側は経験した割合。  
 ・下段：□□□□のうち□□□□は保健所内の行事など実体験による達成割合で、その右側は資料や職員の話など知識による達成割合。  
 ・▼：22期生に比へ20%以上低下したもの。 △：20%以上上昇したもの。 ☆：実体験より知識から達成したと自己評価した実習内容が多かったもの。

図1 実習後の自己評価調査結果 (23期生)

88.8%, その差-5.1%であり, 両期生とも高い割合を示している。平均達成度は22期生73.0%, 23期生55.6%でその差-17.4%である。細項目では1, 3に20%以上の低下がある。1の達成度の内訳は, 実体験から80.0% (18人), 知識から20.0% (4人), 3では実体験から94.5% (26人) 知識から5.5% (2人)であった。以上の差から, 実体験を重要視した目標と言える。

#### F. 看護認識の変化

保健所実習をすることによって, 学生の看護の認識に変化がみられたとする学生が23期生65.3%と前年の87.8%に比べ, -22.5%低下である。この点, 表1の実習項目体験人数とその回数からみると, 100%の経験項目はなく, 80.0%以上が「家庭訪問」「精神障害者共同作業所」である。50.0%以上の経験項目は, 「一般健康診断・相談」55.1% (27人) と, 実習項目の経験(実体験)が少ないことが言える。

#### 2) 全国看護短期大学及び中四国看護専門学校調査から

地域看護学教育の現状を, 全国看護短期大学77校及び中四国の専門学校170校を対象に調査を行った。回収率は118校, 69.4%であった。内訳は短期大学54校 (70.1%), 専門学校(2・3年生課程) 64校 (68.8%)であった。

①地域看護学の講義は, 表2より全国の短期大学の72.2%と半数以上の学校が講義を実施している。専門学校では26.6%が講義を実施していた。

②講義担当教員は表3の通りであるが, 短大では専任の保健婦が17名担当している。授業時間数では大幅な学校差がみられた。学校別平均では, 短期大学が36時間, 専門学校が16.8時間となっている。

③短期大学で地域看護の実習を実施していないと回答したのは1校あり, 他に1校は無回答であった。専門学校で実習をしていないと回答したのは17校である。その理由として, 「時間が無い」が8校, その他「担当教員がいない」「実習施設がない」などが8校であった。

④地域看護学実習については, 複数回答であるが, 第1位は保健所で, 短期大学, 専門学校ともに最も多く90校が実習していた。次に市町

村保健センターで27校, 訪問看護ステーションで27校, 病院訪問看護部で11校となっている。その他の回答では, 社会福祉協議会, 老人ホームなどの施設もみられた。

## 4. 考 察

保健所実習終了後, 実習目標に対する学生の自己評価調査を行った。回収率は98.0%と高率であった。

本学では, 地域看護学の位置づけは成人保健, 老人, 母性, 小児などの中を含めて授業を実施している。保健所実習目標に対する学生の自己評価から保健所実習の目標に対する経験率は, 85.9%の学生が経験したとしている。しかし, その達成度は全体に低く, 22期生と比較すると23期生は全体的に低率である。

23期生で高い平均達成度は「C. 公衆衛生看護活動の展開」55.8%, 「E. 継続性への認識」55.6%と, 半数の学生は達成したとしている。Cの細項目で, 低い達成度は「3. 家族を1単位とした看護の役割が理解できた」32.7% (16人), 「4. 生活環境・習慣と保健の関わりが理解できた」38.7% (19人)である。また, 高い達成度の細項目は「2. 保健婦活動は, 教育, 保健, 指導の3段階であることを学んだ」69.4% (34人)で, 22期生も同じ結果であった。Eの細項目で, 低い達成度は「1. 包括医療・看護(総合看護)の概念が深まった」44.9% (22人)と半数以下である。一方, 高い達成度は「4. 医療チームの連携による看護の継続の必要性が認識できた」63.3% (31人)であった。

病院内実習で学生は患者を疾患を通して看ているため, 保健所実習では看護の概念拡大を目標として人々の生活に向けて健康把握をする。これは本学の講義時間数及び位置づけでは達成は難しいと考える。

図2・図3より, 平均経験度と平均達成度を比較すると, 平均経験度は, 22・23期生には大差なく, 高い割合の経験度がみられる。平均達成度は, 22期生に比べ, 23期生は低くなっている。経験度は大差ないが達成度は低下をしている。これは実習後の自己評価調査結果の達成度の内訳からみて, 実習で知識(資料・説明)からの学習が多くなっていることが言える。表1

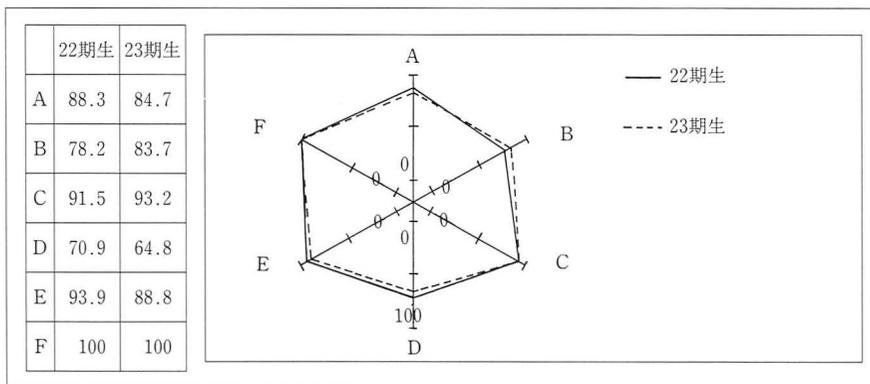


図2 実習目標分類経験度 (%)

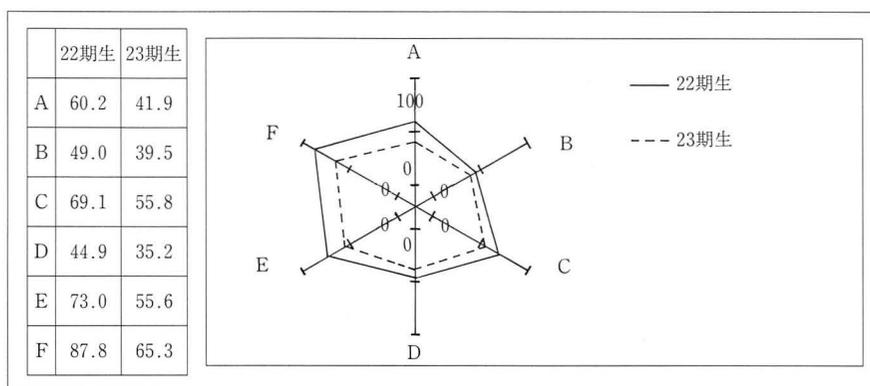


図3 実習目標分類別達成度 (%)

表1 実習項目体験人数とその回数

	項目	人数 (%)	回数	項目	人数 (%)	回数
成人保健	1) 一般健康診断・相談	27 (55.1)	28	4) 骨塩量測定車	16 (32.7)	16
	2) 大型健康増進車	15 (30.6)	15	5) いきいき骨づくり教室	8 (16.3)	8
	3) 健康増進クリニック	19 (38.8)	19	6) 家庭訪問*	15 (30.6)	16
母子保健	1) 乳幼児健康相談	14 (28.6)	14	4) 療育・総合療育相談	1 (2.0)	1
	2) 要観察児指導教室	8 (16.3)	8	5) 家庭訪問*	6 (12.2)	6
	3) 三歳児健康審査	13 (26.5)	13	6) 妊婦健診・相談	3 (6.1)	3
精神保健	1) 精神保健相談	4 (8.2)	4	4) 精神障害者共同作業所	40 (81.6)	57
	2) 精神障害者患者会	7 (14.3)	9	5) 家庭訪問*	23 (46.9)	29
	3) 精神障害者家族会	5 (10.2)	5			
その他	1) 機能訓練	6 (12.2)	6	7) 栄養指導	1 (2.0)	1
	2) 愛育委員会	1 (2.0)	2	8) 同和地区巡回健診・相談	7 (14.3)	7
	3) 保健婦研修会	4 (8.2)	4	9) ボランティアグループ連絡会	2 (4.1)	2
	4) 在宅介護者の集い	2 (4.1)	2	10) 痴呆老人患者介護者研修会	2 (4.1)	2
	5) リフレッシュ講座	1 (2.0)	1	11) 難病患者交流会(パーキンソン病)	5 (10.2)	5
	6) 健康大会	1 (2.0)	1	12) 健康教資料作成(結核)	4 (8.2)	4

\*家庭訪問は全体では44人(89.8%)

表2 看護婦養成学校における地域看護学講義の有無

	看護短期大学	看護専門学校	合計
講義をしている	39 (72.2)	17 (26.6)	56 (47.5)
講義をしていない	15 (27.8)	47 (73.4)	62 (52.5)
合計	54 (45.8)	64 (54.2)	118 (100)

※学校数 (%)

表3 保健所実習における担当教員の割合

	短大	専門	合計
専任教員	※13	3	16
臨地看護婦	1	2	3
保健婦	※11	12	23
助産婦	0	0	0
その他	1	1	2

※この合計24人のうち17人は専任保健婦

でみると50.0%以上の学生の実習項目は、「家庭訪問」89.8% (44人)、「精神障害者共同作業所」81.6% (40人)、「一般健康診断・相談」55.1% (27人)となっている。この3項目は、保健所実習計画の中に組み入れている内容であるが、全員の実習は望めない現実があると言える。これは保健所の機構改革による市町村への移行による所が大きいと考える。しかしながら、短期大学、専門学校ともに保健所を実習施設にしている学校が多いのが現状である。市町村保健センター・訪問看護ステーション・病院訪問看護部・社会福祉協議会など少数であるが取り組んでいる学校があった。今後、保健所に代わってこういった施設実習が増える傾向にある。

講義時間数を平均してみると短期大学は36時間、専門学校では16.8時間である。地域看護学の講義を、カリキュラムに取り入れている学校は、短期大学で39校(72.2%)、専門学校で17校(26.6%)、全体では56校(47.5%)と多くの学校で既に取り組みされている。この点、篠沢ら<sup>3)</sup>の調査(1992年)によると、地域看護の位置付けでの実習は10%で、成人、老人の位置づけが50%となっているが、本調査(1996年)では地域看護学の講座が50%開講されている。本学では、成人保健の中で5時間(保健所実習のオリエンテーションを含む)母性・老人で5時間の計10時間と少ない。講義時間数からみても本学学生の

表4 看護婦養成学校における地域看護学実習の有無

	短期大学	専門学校	合計
実習している	52 (96.3)	46 (71.9)	98 (83.1)
実習していない	1 (1.9)	17 (26.6)	18 (15.2)
無回答	1 (1.9)	1 (1.9)	2 (1.7)
合計	54 (54.0)	64 (46.0)	118 (100)

表5 地域看護学実習を実施している94校の実習場所

	短期大学	専門学校	合計
保健所	38	52	90
訪問看護ステーション	16	11	27
市町村保健センター	14	13	27
病院訪問看護部	4	7	11
その他	1	3	4

※重複回答あり

実習目標と学習の達成度に不一致が考えられる。

本学の保健所実習の目的である「保健福祉活動の実際から地域社会で生活している人々を理解し……」すなわち患者の生活背景を理解するには、地域看護活動に参加し、実際に関わることより、身体・精神・社会面に視点をのいた看護の援助が考えられる。地域看護学の検討は公衆衛生活動に視点をのくか、対象看護に視点をのくかにより大きく実習施設も異なるであろう。急速に変貌する社会の中でこれからの看護婦に求められる役割は何であるか再認識し、社会対応ができることが大切である。この点をカリキュラム上において十分検討を要すると考えている。

## 5. まとめ

看護教育が大きく変わろうとしている中で、進学過程における教育方針が示されず、現状維持が続くのか疑問視している学校は多いと考える。このような状況下での検討であるが、本学第二看護科保健所実習における実習目標の達成度は、経験度に比べ、非常に低いと言える。高い平均経験度(50%以上)は「公衆衛生看護活動の展開」「継続性への認識」のみで、他は50%以下であった。また22期生に比べ23期生に、より達成度の低下がみられている。実習目標に対する経験度、達成度ともに低下している原因は

保健所の機構改革が考えられる。

全国調査では、地域看護学の講義を実施している学校は短期大学では、1校除いて全校であった。担当教員は保健婦が多かった。実習施設は、保健所が多く利用されているが、この点はカリキュラム改正により、大幅に変わるであろう。以上より、進学課程のカリキュラム改正が早急になされる必要生があると考ええる。

#### 文 献

- 1) 宇野恵子, 他: 看護教育における地域看護の検討 (第1報) — 保健所実習の目標に対する自己評価分析 —, 川崎医療短期大学紀要, 16, 7—13, 1996.
- 2) 長瀬初恵, 他: 看護学生の保健所実習目標の検討 — 実習後の自己評価分析から —, 平成8年度地域看護学会集録, 岡山県看護協会, 47—55, 1997.
- 3) 篠沢悦子, 他: 3年過程看護学校の保健所実習など地域看護実習の実態(会議録), 日本公衆衛生雑誌, 41(10), 501, 1994.
- 4) 小野ツルコ, 他: 看護基礎教育における地域看護実習の検討 — 実習記録による分析 — 岡山大学医療技術短期大学部紀要, 5, 9—15, 1995.

